

甲虫の科和名と連濁

保科英人

〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学教育学部

なぜ「ナナホシデントウ」と呼ばないのか？

味噌汁に入れる白い直方体の食材を我々は「豆腐（とうふ）」と呼んでいる。しかし、「豆腐」の前に「湯」なり「木綿」なりを付けて複合語を形成すると、「ゆ—どうふ」「もめん—どうふ」となり、「と」が「ど」に変化することがわかる。これを「連濁」と言う。ふと見渡せば、箱や靴、タンスなど、我々の周りには連濁する名詞で満ち溢れている。そして、走る—一口走る、高い—甲高いなどなど、動詞や形容詞でも連濁は起こりうる。

生物の種和名は、科や属、ないしはより上位の分類階級ごとの共通のグループ和名に、「赤い」「大きい」「足が長い」等の修飾語を前に付けて作るのが基本だ。となると、「か・さ・た・は」行で始まるグループ名を持つ生物の種和名は、元来連濁を起こす可能性が高いはずである。サメ—ホオジロザメはその典型だ。しかし、実際のところ、条件が整っていたとしても、連濁が生じていない種和名はいくらでもある。ナナホシデントウはその代表例だ。本稿では諸生物群と比較しつつ、甲虫の科和名の連濁の有無について検証することとした。

(1) 連濁が起きる条件

日本語にはなぜ連濁と言った現象が起きるのか。まず和語には濁音で始まる語がなかった。そこで、あえて濁音とすることで、その濁音のすぐ前で意味が切れる複合語であることを示せる、との指摘がある（小松，1981）。つまり、雨傘を「あまかさ」ではなく「あまがさ」と読むことで、「あまが・さ」でも「あ・まがさ」でもなく、切れ目は「あま・がさ」であることがはっきりする、と言うわけだ。

しかし、連濁は「か・さ・た・は」行で始まる単語全てで生じるわけではない。最初に、「トマト」「カメラ」「フェリー」などの外来語では連濁はほぼ起こらない。次に、「火事」「旅」「幅」など、最初から濁音を含む語が複合語を構成しても連濁はまず生じない。生物和名で言えば、クワガタ、トンボ、ハゼ、ヘビなどのグループ内で「オオグワガタ」「シオカラドンボ」「ゴクラクバゼ」「シマベビ」にならないのは、ほぼこれで説明できる。三番目に、「試験」「法」「会」などの漢語も連濁が起こり

にくい。菓子—綿菓子、砂糖—黒砂糖のように例外は少なからず存在する（窪菌監修，1999）。最後に、一方の要素が他方を修飾する際は連濁する可能性があるが、並列構造の複合名詞は連濁を起こさない（窪菌，1999）。例えば、「好き嫌い」のように二語が並列する場合は「すききらい」となるが、前方語が後方語を修飾する「食わず嫌い」では「くわずきらい」と読むのである。生き物で言えば「ウミガメ」と連濁させることで、海産動物の知識がゼロの人でも「海と亀」ではなく「海の亀」であると理解しやすくなる側面がある。この他にも連濁が起きにくい条件は多々あるが、それらについては佐藤（1989）や窪菌（1999）を参照していただきたい。

(2) なぜ「カミギリムシ科」ではないのか？

タマキノコムシ、コキノコムシ、ツツキノコムシなど、科和名に「キノコ」を含む甲虫の科は多いが、「ギノコ」と濁音化しない理由は明白である。毒キノコ、栽培キノコと、我々は日常生活でも「キノコ」を連濁させないからである。しかし、「食い」「搗き」「切り」などの動詞連用形は連濁可能にもかかわらず、キクイムシ、ツツシンクイムシ、コメツキムシ、カミキリムシなどの甲虫の科名の中では、「グイ」「ツキ」「ギリ」などの連濁が生じていない。逆に、ヒゲブトチビシテムシ亜科とヒゲブトコメツキ科では、「太」が「ブト」と濁音化しているのではないか。なぜ我々は「カミギリムシ」との科名を与えなかったのか？

実は、佐藤（1989）によれば、名詞+動詞連用形の構造を取り、動作の結果生じる物の場合、「梅干し」「人相書き」などなど、動詞の頭文字が濁音化すると言う。一方で、複合されて「その動作をする人」との意味になる時は連濁が見られない。事例としては「絵描き」「相撲取り」などがある。名詞+動詞連用形で構成される生物名においても「～をする人」と同様の法則が当てはまるようで、その結果、連濁はまず起きないらしい。確かに、カミキリムシやコメツキムシ以外の生物でも、昆虫類のチャタテムシやカマキリ、哺乳類のアリクイ、鳥類のサンショウクイ、甲殻類のヤドカリでは「ダ

テ」「ギリ」「ダイ」「ガリ」の連濁が一切生じていないことがわかる。科名で時々見かける連濁「ヒゲブトー（髭太）」は名詞＋形容詞なので、「カミキリ」とはまた違う文法構造なのである。

もっとも、カミキリムシとほぼ同じ文法構造であるはずのミツギリゾウムシ科の存在は頭を悩ませる。ミツギリゾウムシについては例外と扱うべきか、それとも三つ切、四つ切との日常用語が身近で定着しているが故の連濁と見なすべきなのか？

とりあえず我々はなぜ「カミギリムシ」と呼ばないのか、との疑問については佐藤（1989）を引用することで答えられそうである。

(3) 連濁率が低い甲虫の科・亜科和名

そもそも連濁がいかなる条件下で起こるかは(1)で述べたような傾向はあるものの、絶対的な法則があるわけではない。結局のところ、言語を使う民族の気まぐれに左右される部分も大きい（遠藤，1981）。例えば、鳥和名の連濁で言えば、カモメとカラスは対照的な結果になるが、その理由を言語学的に解説するのはおそらく不可能である。また、同じキツネの仲間のはずなのに、ホンドギツネとキタキツネと、連濁の有無が分れてしまうのも合理的な説明は難しい。

生物の種和名では「セグロー」「ヒゲボソー」のように科や属名を修飾する前方部分で連濁が見られるものも多い。(2)では、科名や亜科名の内部、つまり2文字名以降に生じる連濁について述べた。(3)以降では、種和名の後方部分にあたる科や亜科、属名などのグループ名、つまり「ホタル」「テントウムシ」「ハクチョウ」「ケルミ」などの名前の1文字目で起こる連濁に検討対象を絞った。主対象となるのは甲虫であるが、比較のために他の生物群のグループ和名も調査することとした。まず、井上ら（1965）、伊藤ら（1977）、高野（1982）、林ら（1984）、黒澤ら（1985）、上野ら（1985）、林（1989）、川那部ら（1989）、佐竹ら（1993）、阿部（1994）、松橋・奥山（2002）、松橋・富田（2007）、日本チョウ類保全協会編（2012）を主な参考文献とした。そして、昆虫、哺乳類、鳥類、両生爬虫類、淡水魚、草本植物、木本植物ごとに、頭文字で連濁が生じる可能性がある科、亜科、属、日本産亜種を含む種など、何らかのグループを示す和名を抽出し、連濁の有無を○×で整理したのち、連濁率を計算した。もちろん、上記文献内では現在では使われていない科名や亜科名も多々あるが、本稿では当時の和名を無条件で採用して、リストアップ対象にしている。

なお、グループ名には必ずしも分類学的に単一の科や亜科、属和名を指さない名称も連濁候補に含めてある（例えば鳥類の「一カラ」など）。さらに明らかに漢語由来の科名、亜科名であっても、とりあえずは連濁の可能性のある名称として取り扱った。逆に、シデムシ、タナゴ、カイツブリなど元々濁音を含むもの、また、ハバチやフンバエなどグループ名内で既に連濁が生じているものは、候補から外した。

連濁判定の際、マスノサケ・ギンザケ、ホンドギツネ・キタキツネ、オオタカ・アカハラダカのように同じグループ内で連濁の有無が分かれる場合は「連濁有り」と判断する。一方、「エゾタヌキ」と「子狸」のように、生物和名では濁音とにならないが、日常単語では濁音となるものは「連濁無し」とした。

整理結果は表1～3である。参照文献をあえて絞っているので、見落としているグループ名が少なからずあることはご了承いただきたい。哺乳類・鳥類・両生爬虫類・淡水魚の脊椎動物組や樹木の連濁率が3、4割に達したのに対して、昆虫類は軒並み低いことがわかる。鱗翅目はゼロで、甲虫目もホタルを除き、グループ名では連濁が一切生じていない。草本植物は連濁率19%と一見低いように思えるが、マツヨイグサ、トウダイグサ、ウマゴヤシなどなど、グループ名の中で元々連濁を起こしているものが少なくない。よって、グループ名の頭文字に限定せず、単に連濁の有無だけを見るならば、草本植物の実質的な連濁率はもっと高いはずである。

ここで、生物ではない一般名詞の連濁率はどれくらいなのか、目安の数値を比較対象として知りたいところである。仕方がないので近所のホームセンターと食品スーパーに赴き、「机：○」「水槽：×」「焼酎：○」「こんにやく：×」などなど、売り場に並ぶ和語・漢語から成る連濁可能な全商品をチェックして連濁率を求めてみた。結果はホームセンターが37/58で64%、食品スーパーが40/68で59%と、共に約6割に達した。

こうして見ると、昆虫のグループ名の連濁率とはとにかく低い。甲虫目・鱗翅目以外の昆虫については22%と、まあまあの数値を示しているが、これは昆虫全般の図鑑としては簡略版とも言うべき伊藤ら（1977）のみを参考にしたからとも考えられる。仮に九州大学昆虫学教室編集の『日本産昆虫目録』掲載の昆虫全種を参照したならば、連濁率はさらに落ちるはずである。ありとあらゆる昆虫和名を思い浮かべても、昆虫全体の中で連濁を起

表1. 昆虫のグループ名

昆虫 (甲虫・鱗翅以外)	鱗翅目(続き)	甲虫目(続き)	
シラミ	○ カノコ	× カッコウムシ	×
セミ	○ ヒトリ	× ツツシンクイ	×
ハエ	○ ケンモン	× ヒメキノコムシ	×
ハチ	○ トモエ	× タマキスイムシ	×
コムシ	× コノハ (蛾)	× ケシキスイ	×
サナエ	× ジャチホコ	× ツツヒラタムシ	×
カマキリ	× カレハ	× ヒラタムシ	×
ハサミムシ	× ジャク	× ホソヒラタムシ	×
ツユムシ	× フタオ	× キスイムシ	×
クツワムシ	× コウモリ	× カクホソカタムシ	×
ササキリ	× ハマキ	× テントウ	×
カンタン	× 連濁率	0%	
シロアリ	×	× ヒメハナムシ	×
チャタテ	×	× ツツキノコムシ	×
カメムシ	×	○ ホソカタムシ	×
コオイムシ	×	× キマワリ	×
タイコウチ	×	× クチキムシ	×
カ (蚊)	×	× ホソキカワムシ	×
連濁率	22%	× コケムシ	×
		× ハネカグシ	×
鱗翅目		× クロツヤムシ	×
チョウ	×	× タمامシ	×
ヒョウモン	×	× コメツキ	×
タテハ	×	× ヒラタキクイムシ	×
コノハ(蝶)	×	× ヒョウホンムシ	×
セセリ	×	× コクヌスト	×
		連濁率	3%

表2. 哺乳類・両生爬虫類・鳥類・淡水魚のグループ名

哺乳類	鳥類	鳥類 (続き)	
サル	○ カモ	○ センニュウ	×
クマ	○ ツル	○ ヒワ	×
キツネ	○ ケリ	○ カケス	×
シカ	○ タカ	○ 連濁率	31%
シマリス	× ハト	○	
タヌキ	× ヒタキ	○ 淡水魚	
テン	× カラ	○ サメ	○
コウモリ	× カラス	○ サケ	○
カワウソ	× ハクチョウ	× コイ	○
カモシカ	× キンクロ	× フナ	○
連濁率	40%	× カモメ	×
		× コウ	×
両生爬虫類		× トキ	×
カエル	○ クイナ	× シラウオ	×
カメ	○ トウネシ	× ハヤ	×
サンショウウオ	× チュウヒ	× カマツカ	×
タカチホ	× フクロウ	× サヨリ	×
ハイ	× カッコウ	× トミヨ	×
連濁率	40%	× カワセミ	×
		× ハチクイ	×
		× セキレイ	×
		× サンショウクイ	×
		× セッカ	×
		× 連濁率	38%

表3. 植物のグループ名

木本植物	木本植物 (続き)	草本植物(続き)	
クルミ	○ ホルトノキ	× トラノオ	×
カシ	○ フトモモ	× シロネ	×
カシワ	○ サツキ	× キランソウ	×
シイ	○ ハナヒリノキ	× タムラソウ	×
クリ	○ クロキ	× タツナミソウ	×
クワ	○ クチナシ	× スミレ	×
サクラ	○ チシャノキ	× ツリフネソウ	×
サンショウ	○ クロ	× ツメクサ	×
カキ	○ 連濁率	40%	
タケ	○	× フウロ	×
ササ	○	× カワラサイコ	×
シュロ	○ 草本植物	× カンアオイ	×
ハンノキ	○ キク	○ カキラン	×
カツラ	× キキョウ	○ ツククサ	×
サルナシ	× セリ	○ ホシクサ	×
サカキ	× ケシ	○ ヒルムシロ	×
ヒサカキ	× カヤ	○ ススキ	×
シモツケ	× ヒエ	○ ホタルイ	×
カナメモチ	× キリンソウ	× テンツキ	×
カマツカ	× ハハコ	× ハリイ	×
カンコノキ	× カラスウリ	× チャヒキ	×
シロテツ	× タヌキモ	× カモノハシ	×
	× ハッカ	× 連濁率	19%

こすグループ名は表1にあげたシラミ、セミ、ハエ、ハチ、ホタルの5つに限定されるのではないだろうか。見落としがあればご指摘を請う。

では、なぜ昆虫の連濁率は低いのか？まず、あまりに専門的な名称の場合、連濁した際に聞き手が元の単語に復元できるか、との問題がある。例えば、「かけ一ふとん」と聞かされた時、日本人なら「ふとん」を「ふとん」にすぐに脳内で復元でき

る。しかし、仮に「一ゲシキスイ」との連濁が起こった場合、果たしてどれだけの非虫屋の人間が元の科名の「ケシキスイ」を思い浮かべることができるか？「ゲシキスイとは夏至の時期に出現して、木の汁を吸う虫のことか」と曲解する人々が出てきてもおかしくはない。我々は命名の際に専門家の仲間内でしか使わない名称の連濁を無意識に避けているのだろうか？

表1～3を見ると、昆虫であれ、哺乳類であれ、淡水魚であれ、身近でよく聞く生き物のグループ名ほど連濁を起こしやすい傾向は確かにある。とは言え、鳥類のヒタキとケリが連濁する一方で、誰しもが姿形をイメージできるカモメとフクロウは連濁しない。樹木のシュロ属の種にワジュロ、トウジュロとの和名が付けられているのに対して、知名度抜群であるはずのスミレではアリアケスミレ、コスミレと清音のままである。生物名における連濁の有無は、人との関係の親疎だけで説明しきれるものでもなさそうだ。(4)では、別の言語学的側面を取り上げて、昆虫の連濁率の低さの理由を検証したい。

(4) なぜ「ナガレガマツカ」と命名されなかったのか？枝分かれ構造説

愛知県巴山(ともえさん)で新種のホタルが見つかったと仮定する。そして、この発見者が実はセーラーサターンこと土萌はたるの大ファンであるとしよう。しかし、この御仁が「巴山で捕れた新種

だから」と無理やりこじつけて、「トモエホタル」と命名するには相当な勇気がある。なぜなら、種和名を新たに付ける際、後ろに置く科和名を連濁させるかどうかは既存の種和名に準拠せねばならぬ、との強迫観念が発見者にあるからである。つまり、既にゲンジボタル、ヘイケボタルとの名称が完全に定着している以上、この御仁は「トモエボタル」と命名するのが精一杯の抵抗なのである。逆に言えば、同一分類群内に既存の種和名が複数種存在する限り、連濁の有無は自身で判別しなくても良いわけだ。

では、一属一種ないしは一科一種だった分類群に新たな新種が見つかった場合、発見者は如何なる基準で種和名を連濁させるか否かを決めるのであろうか？ここで淡水魚のカマツカを例にとってみよう。日本産コイ科カマツカ亜科カマツカ属はカマツカただ1種が知られていたが、Tominaga & Kawase (2019) が新たに2新種を見出し、日本産カマツカは3種に分かれたことは記憶に新しい。つまり、カマツカの2新種の発見者は、神武天皇が皇紀元年に白禰原宮で即位して以来、倭国史上初めて「カマツカ」を連濁させるか否かの難しい判断を迫られたはずである。結局、カマツカの2新種はナガラカマツカとスナゴカマツカと命名された。

カマツカは体型が湾曲して鎌の柄に似ることから「鎌柄」との名が付けられている(望月, 1997)。言うまでもなく、鎌は「くさり鎌」「手鎌」などのように「一がま」と連濁する。そして、淡水魚にはニゴイ、ゲンゴロウブナ、ギンザケなど連濁を起こしている種和名が身近にある。にもかかわらず、命名者はなぜ2新種を「一ガマツカ」と連濁させなかったのか？

佐藤(1989)は複合語内の枝分かれ構造に注目し、「三語から成る複合語において、その構造が左枝分かれならば後続語は連続的に濁音化することが可能である。しかし、右枝分かれでは第二語は濁音化しない」と指摘した。具体例を出そう。「オジロワシ」と「モンシロチョウ」、ともに「尾・白・鷺」「紋・白・蝶」の三語からなる複合語であるが、なぜ「白」で連濁の有無に違いが出ているのか。オジロワシは(尾+白)+鷺であって、「白」は前方の「尾」と意味的なまとまりを作る。一方、モンシロチョウは紋+(白+蝶)で、「白」は右後方の「蝶」を修飾する。これが「モンシロチョウのような右枝分かれ構造では二語目は連濁しない」との意味である。よって、ナガラカマツカは明らかに、流れ+(鎌+柄)との右枝分かれ構造なので、「一ガマツカ」にならなかった、と解釈できるわけだ。

ある。一方、ギンブナは銀+鮒にすぎず、「フナ」はそれ以上分けられないとの点で、カマツカとは事情が大きく異なる。もちろん、チヌーナンヨウチヌのように、分割不可能な淡水魚のグループ名でも連濁が起きないものはやっぱり起きていない。

甲虫で言うなら、アオバネホソクビゴミムシやコバネカミキリなど、「羽」自体は容易に濁音化するのに、メダカハネカクシと呼ぶのは、めだか+(羽+隠し)と「羽」が右側のまとまりに位置するからだ、との指摘ができる。同様に、「山椒」や「亀」自体は連濁するのに、サンショウウオ科やカメムシ亜目内に連濁する和名が見られないのも、同じ説明が可能である(サシガメ科については後述)。

佐藤(1989)の枝分かれ構造説は、現在言語学の絶対的な定理とまでは扱われていない。実際、「耳年増」(みみどしま: 耳+(年+増))や、「小手毬」(こでまり: 小+(手+毬))など、右枝分かれ構造でも連濁を起こす語は存在する(鈴木, 2007)。ただ、枝分かれ構造説は、生物和名の連濁の有無に対しては、うまく合致する説である。枝分かれ構造説を生物和名の世界に限って言えば、科や属などのグループ和名自体が複合語である場合、種和名となっても、その頭文字は濁音化しない、と単純化できる。確かに表1~3を見ると、連濁が生じているグループ名は単一語ばかりである。

佐藤(1989)は三語からなる複合語しか想定していないが、枝分かれ構造説は四語以上でも適用は可能と思う。甲虫にはホソカタムシ科やタマキノコムシ科など、科名自体が三語からなるものも少なくない。Hoshina (2012) で記載されたツメプトオオタマキノコムシ *Leiodes toyoshimai* の場合だと、種和名は(爪+太)+大+(玉+茸+虫)の3つに枝分かれするが、左側の太は「プト」と濁音化する一方で、右側の「玉」は清音のままなので、枝分かれ構造説に矛盾していない。

甲虫の科名・亜科名で言えば、ホタルとハンミョウ以外はグループ名自体が二語以上の複合語だ。ハネカクシやコクヌスト、ケシキスイ、ハナノミなどを除き、大半の科名が「一ムシ」で終わるのだから当たり前である。となれば、甲虫では「一バムシ」「一ダムシ」と言った連濁は一切生じず、複合語ではないホタルのみが濁音化している現象は、枝分かれ構造説でかなりの説明が付くことになる。

(5) 科名の省略と連濁。昆虫と貝の間の大きな違い

「エノコログサ」とのグループ和名から種和名が作られる時、キンエノコロやハマエノコロとなるように、グループ和名の末尾が省略されることが

ある。如何なる場合にこの省略が起きるかについては、おそらく合理的な説明はできない。単に命名者の趣味の一言に尽きると思う。

甲虫目ではコガネムシ科、クワガタムシ科、コメツキムシ科、ジョウカイボン科、ムクゲキスムシ科、オオキノコムシ科、テントウムシ科、ナガクチキムシ科、カミキリムシ科、チョッキリゾウムシ亜科などが種和名になる際に末尾が取れる。テントウムシダマシ科のように中央の「ムシ」が取れて、種和名が「一テントウダマシ」となる変わり種もいる。

連濁との観点で言えば、種和名を作る際に、末尾の「一ムシ」が削除されることで、(4)の枝分かれ構造の呪縛から解放され、頭文字が濁音化する科や亜科名が出てきてもおかしくない。ただ、コガネとクワガタは元々濁音を含むし、コメツキとカミキリは「ムシ」が取れても「米・搗き」「髪・切り」と複合語のままである。チョッキリも「ちょっ・切り」と見なすべきだろう。となると、連濁候補は「一テントウ」に絞られるが、種和名はナナホシテントウ、ナミテントウであって、連濁は起こっていない(その理由は後述)。

グループ名の末尾が省略されても連濁しないと言うのは、昆虫綱全体の傾向と言えそうだ。サナエトンボ科—オオサカサナエ、タテハチョウ科—ルリタテハ、セセリチョウ科—イチモンジセセリ、シャクガ科—ウスバフユシャク、コウモリガ科—キタコウモリと、とにかく濁音化しない。サナエトンボ科なんかは「ヒメザナエ」と呼んでも語呂は合いそうだが、実際連濁していないのだから仕方がない。一般名詞で言えば、玉子の「子」が取れて、ニラ玉・カニ玉となっても濁音化しないので、特におかしな話でもないのだろう。

一方、貝類は昆虫綱とは事情が大きく異なる。そもそも貝類はイシガイ科やモノアラガイ科のように「貝」が連濁し、その結果、科名自体に濁音を含みやすいため、種和名を作る際に科和名の頭文字に連濁が起きにくい傾向がある。ただ、その代わりにと言うのも変だが、吉良(1954)を参照すると、タカラガイ科—オトメダカラ、キセルガイ科—ナミギセル、シャコガイ科—ヒメジャコ、ホラガイ属—イボボラと、科和名ないしは属和名から種和名を作る際に、少なからず「ガイ」の省略に伴う連濁が生じていることがわかる。もっとも、タケノコガイ科—シマタケのように濁音化しない種もいるので、貝類も一枚岩ではない(注1)。

昆虫綱でも、貝類のような末尾省略に伴う連濁の事例はゼロではない。カメムシ亜目ではヘリカ

メムシ科、ホシカメムシ科などなど、科名における「カメ」の連濁はほぼ見られないのだが(安永ら、2001)、サシガメ科とマキバサシガメ科だけが「一ムシ」の省略と同時に「一ガメ」と濁音化している点は不思議である。

ただ、昆虫綱の中ではサシガメ科はかなりの少数の事例と見られる。末尾省略に伴う連濁の発生との点で、昆虫と貝の間には大きな差があるように思える。しかし、その違いを生みだした文化的背景については、筆者に思い当たる理由はない。

(6) 考察. 連濁が起きにくい甲虫目の科名・亜科名

クマ、フナ、セミ、ホタルと違って、専門家のみが接する大半の甲虫は、気の利いたグループ名を持っていない。大抵の甲虫の科名や亜科名は、形態的・生態的特徴となる単語を複数組み合わせた複合語となりやすい傾向がある。となれば、仮に(4)の枝分かれ構造説を念頭に置くなら、科名・亜科名が複合語で形成される甲虫は連濁が絶対的に生じにくいとの推論に導ける。(3)で「生き物」と人の間の関係の親疎だけでは連濁の有無は説明できない」と述べた。しかし、専門家しか扱わない分類群名が大概複合語であることを考慮すると、「人が親しみを持つ生き物ほど連濁しやすい」と解釈するのもあながち間違いとも言いきれないのか。なお、筆者は国語学の専門家ではないので、佐藤(1989)の枝分かれ構造説をどこまで根拠として、科名・亜科名の連濁を論じてよいかについては自信がない、との逃げ道は用意しておく。

甲虫目の連濁可能な科名・亜科名のうち、明らかに複合語でないのはホタルとハンミョウだけである。そして、種和名を作る際に科名ないしは亜科名の末尾が取れて、複合語でなくなるのがテントウである。上記3つの名前のうち、甲虫目唯一の連濁事例のホタルを除く2つを改めて検証してみる。ハンミョウとテントウは共に漢語なので、冒頭で述べた「漢語は連濁しにくい」との法則が適用できる。よって、種和名は「カワラバンミョウ」や「ナナホシテントウ」とはならないのだ、と解説が可能である。

以上、「漢語は連濁しにくい」「枝分かれ構造説」の2つを持ち出すことで、甲虫の科名・亜科名で連濁を起こすのはホタルのみであることの、一応のもっともらしい説明は付く。これが筆者なりの結論である。

(注1) タカラガイ科のオトメダカラ、ホシダカラのように、従来貝類の和名の末尾には「一ガイ」

が付かない、呼び捨てのような種も多かった。しかし、60年代半ば以降の図鑑からは、「ーガイ」をつける傾向が強くなった(岡本, 2002)。例えば、吉良(1954)ではシロカラマツ(カラマツガイ科)との和名が掲載されているが、現在ではシロカラマツガイの和名が通常用いられている。貝類の種和名にはかなりの変遷が見られるのは事実らしい(岡本, 2002)。

現在、オトメダカラはオトメダカラガイと呼ばれることもある。オトメダカラガイは乙女+(宝+貝)なので、明らかに(4)で述べた、本来なら濁音化しないはずの右枝分かれ構造を取る。しかし、「ダ」で連濁が生じているので、オトメダカラガイは佐藤(1989)には当てはまらない例外のように思える。もっとも、鈴木(2007)によれば、「ーダカラガイ」形は「ーダカラ」を元に人工的に作られたものに過ぎない。よって、仮に最初から「ーダカラ」形がなければ、「オトメダカラガイ」になっていたはずだ、と指摘している。

謝辞

言語学的観点から連濁について多くの助言を下された福井大学教育学部の高山善行教授(国語学)に厚く御礼申し上げます。また、貝類に和名について助言をいただいた本学会の青木淳一博士に深謝申し上げます。

引用文献

- 阿部 永監修, 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会. 195 pp.
 遠藤邦基, 1981. 非連濁の法則の消長とその意味. 一濁子音と鼻音との関係から一. 国語国文, (559): 38-54.
 林 匡夫・森本 桂・木元新作編, 1984. 原色日本甲虫図鑑 IV. 保育社. 438 pp.
 林 弥栄監修, 1989. 山溪ハンディ図鑑 1. 野に咲く花. 山と溪谷社. 623 pp.
 Hoshina, H., 2012. Review of the tribes Sogdini and Leiodini from

- Japan and North Chishima Islands. Part II. Genera *Hydnobius* and *Leiodes* (Coleoptera: Leiodidae). Acta Entomologica Musei Nationalis Pragae, 52, supplementum, 1: 1-168.
 井上 寛・岡野磨瑛郎・岡野磨瑛郎・白水 隆・杉 繁郎・山本英穂, 1965. 原色日本昆虫大図鑑 I (蝶蛾編). 北隆館. 284 pp.
 伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦 勇編著, 1977. 原色日本昆虫図鑑 (下). 保育社. 385 pp.
 川那部浩也・水野信彦・細谷和海編, 1989. 日本の淡水魚. 山と溪谷社. 719 pp.
 吉良哲明, 1954. 原色日本貝類図鑑. 保育社. 240 pp.
 窪蘭晴夫, 1999. 日本語の音声. 岩波書店. 246 pp.
 窪蘭晴夫監修・田中真一・窪蘭晴夫著, 1999. 日本語の発音教室. 理論と練習. くろしお出版. 137 pp.
 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛の編, 1985. 原色日本甲虫図鑑 III. 保育社. 500 pp.
 小松英雄, 1981. 日本語の音韻. 中央公論社. 348 pp.
 松橋利光・奥山風太郎, 2002. 日本のカエル+サンショウウオ類. 山と溪谷社. 191 pp.
 松橋利光・富田京一, 2007. 日本のカメ・トカゲ・ヘビ. 山と溪谷社. 256 pp.
 望月賢二監修, 1997. 図説魚と貝の大事典. 柏書房. 497 pp.
 日本チョウ類保全協会編, 2012. フィールドガイド日本のチョウ. 誠文堂新光社. 327 pp.
 岡本正豊, 2002. 図鑑ごとに違う貝の和名. 統一が混乱を招いた. p. 75-103. 青木淳一・奥谷喬司・松浦啓一編, 虫の名, 貝の名, 魚の名. 和名にまつわる話題. 東海大学出版会. 242 pp.
 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編, 1993. フィールド版日本の野生植物. 木本. 平凡社. 219 pp.
 佐藤大和, 1989. 複合語におけるアクセント規則と連濁規則. p. 233-265. 杉藤美代子編, 講座日本語と日本語教育. 第2巻. 日本語の音声・音韻 (上). 明治書院. 394 pp.
 鈴木 豊, 2007. ライマン法則例外の成立過程について. 「タカラガイ」(宝贝)を後部成素とする語の連濁一. 文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要, (7): 278-294.
 高野伸二, 1982. フィールドガイド日本の野鳥. 日本野鳥の会. 342 pp.
 Tominaga, K. & S. Kawase, 2019. Two new species of *Pseudogobio* pike gudgeon (Cypriniformes: Cyprinidae: Gobioninae) from Japan, and redescription of *P. esocinus* (Temminck and Schlegel 1846). Ichthyological Research, 66: 488-508.
 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑 II. 保育社. 514 pp.
 安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫編, 2001. 日本原色カメムシ図鑑. 第二巻. 全国農村教育協会. 350 pp.

(2019年10月26日受領, 2019年12月8日受理)

【短報】シモジマルキマワリの伊良部島からの記録



図1. 伊良部島産シモジマルキマワリ.

ゴミムシダマシ科シモジマルキマワリ *Amarygmus (Amarygmus) picitarsis* (Fairmaire, 1882) は、従来国内では沖縄県宮古諸島下地島以外では記録がなかった(秋田・益本, 2016)。昨年、筆者は同種を同諸島の伊良部島において採集したので、国内新分布地として報告する。

1 ex., 沖縄県宮古島市伊良部(伊良部島), 22. V. 2019 (図1)。

街灯(水銀灯)直下の樹幹に静止している個体を採集した。

末文ながら、同定にご意見を賜った秋田勝己氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 秋田勝己・益本仁雄, 2016. 月刊むし・昆虫大図鑑シリーズ9, 日本産ゴミムシダマシ大図鑑. 302 pp. むし社, 東京.

(須田 亨 372-0006 伊勢崎市太田町 770-4)